

イマージョン教育についての一考察 —諸外国の日本語イマージョンプログラムの例を通して—

うるま市立高江洲中学校教諭 野 口 悦 子

I テーマ設定の理由

沖縄県教育委員会は、今年平成 19 年 1 月「県立学校編成整備計画に関する懇話会報告の概要について」において、英語関連学科を持つ学校を指定して数学・理科など各教科を英語で教える「イマージョン教育」の研究を行う、という方針を発表した。

イマージョン教育は、第二言語に浸りきってそれを媒体として学習し、同時にその言語を習得することを目的とする新しい外国語教授法で、カナダで始まったフランス語イマージョンプログラムの成功例を基に、世界各地で様々な言語を取り入れたイマージョンプログラムが進められている。日本における取り組みは、まだ約 10 校程度と数少なく、そのほとんどが私立学校である。それゆえ、沖縄県が始めようとしている公立学校での英語イマージョン教育はまさに画期的な構想であるが、今日英語が世界共通語になりつつあるという現状や、沖縄県特有の地理的、社会的、文化的背景から考えると、この新しい取り組みは大変意義があるだろう。

世界各地の例では、スペイン語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、ロシア語、アラビア語、中国語、日本語など、その地域と関係の深い外国語を目標言語としてイマージョンプログラムが行われているケースが多い。言語を学習する際、学習に対する社会的動機付け(学ぶ目的)及び目的言語と母語との言語体系は、学習者に大きな影響を及ぼす。そこでここでは、言語体系が同じであり、社会的背景が比較的似ているだろうと考えられる日本語イマージョンプログラムを実施している諸外国の学校を例に、イマージョン教育の利点と英語イマージョン教育における英語教師の役割について考える。

II 研究内容

1 イマージョン教育について

1960 年代にカナダで始まったイマージョンプログラムを世界各地で実施するためには、その国独自の社会的、文化的背景により方法・形態等を変えていく必要があるが、一般的に言われているイマージョン教育の目標、形態は次の通りである。

(1) イマージョン教育の目標

- ① 第二言語能力(目標言語)の習得
- ② 地域が指定する教科学習内容の達成
- ③ 異文化受容姿勢の育成
- ④ 母語の発達

(2) イマージョンプログラムの形態

開始年齢(表 1)、目標言語との接触時間によって形態の分類は異なる。どの年齢から、どの形態でプログラムを実施するのかによって成果が異なってくるため、これらは大事な要素である。

① 開始年齢による分類

表 1 開始年齢による分類 (Wikipedia を参考に作成)

早期イマージョン	5～6 歳からの開始
中期イマージョン	9～10 歳からの開始
後期イマージョン	11 歳～14 歳からの開始

② 目標言語との接触時間による形態の分類とそれぞれの目的

ア 完全イマージョン：カナダで始められた方法。授業のほぼ 100%が目標言語で行われる。他の教科も目標言語によって教えられ、カリキュラム全体を通して言語習得することを目標としている。実社会で使える自然な言葉をマスターし、他文化を理解してその良さを知っていくことが最終目標である。

イ 部分イマージョン：授業の 50%程度が目標言語で行われ、必要に応じて言語習得のための時間も設ける。目的は完全イマージョンと同じである。

ウ 双方向イマージョン：アメリカで始められた方法。その地域の主流言語(例：英語)が母語である

生徒と、目標言語（例：日本語）が母語である生徒が約 50%ずつ在籍するクラスで、カリキュラムの 50%を主流言語、残りの 50%を目標言語で行う。生徒達が互いに補い合って両言語を習得することを目的としている。

2 諸外国における日本語イマージョンプログラムの例

現在、常時日本語イマージョンプログラムを行っているのは、表 2 のように、アメリカにおいて 22 校、フランス 1 校、オーストラリア 2 校である。アメリカの小学校は幼稚園を含む。

表 2 常時日本語イマージョンプログラムを行っている学校（2006 年 12 月現在 Wikipedia を参考に作成）

国	州	都市	学校名	学校種	形態	公/私立
アメリカ	アラスカ	アンカレッジ	サンド・レイク	小中高一貫	部分	公立
			ミアーズ			
			ダイヤモンド			
	イリノイ	シャンパーグ	トーマス・A・デューリー	小	双方向	公立
		オーク・パーク	インター・カルチュラル・モンテッソーリ・ランゲージ・スクール	小	完全	私立
	オハイオ	シンシナティ	アカデミー・オブ・ワールド・ランゲージーズ	小中高一貫	部分	公立
	オレゴン	ポートランド	リッチモンド	小中高一貫	部分	公立
			マウント・テーパー			
			グラント			
		ユージーン	ザ・インターナショナル・スクール	小	完全	私立
			友人学園	小中高一貫	部分	公立
			ケリー			
			ノース・ユージーン			
	カリフォルニア	カルバー・シティ	エル・マリノ・ランゲージ・スクール	小	完全	公立
	ジョージア	アトランタ	聖学院アトランタ国際学校	小	双方向	私立
	ノースカロライナ	シャーロット	スミス・アカデミー・オブ・インターナショナル・ランゲージーズ	小中高一貫	小・完全 中・部分	公立
			ウエスト・メクレンバーグ	高	部分	公立
	ヴァージニア	フェアファックス	フォックス・ミル	小	部分	公立
			グレート・フォールス	小	部分	公立
			クーパー	中	部分	公立
	ミシガン	デトロイト	FLICS 外国語イマージョン文化学校	小中高一貫	完全	公立
	ワシントン	シアトル	ジョン・スタンフォード・インターナショナル・スクール	小	部分	公立
フランス		リヨン	リヨン国際学園日本語科	小中高一貫	部分	公立
オーストラリア	ヴィクトリア	オークレイ	ハンチングデール	小	部分	公立
	クィーンズランド	ロックハンプトン	クレセント・ラグーン	小	完全	公立

注) 学校種：小→小学校，中→中学校，高→高等学校

図1より日本語イメージンプログラムを実施している学校は、小学校が多いことが明らかである。小学校からの一貫校を含めると、90%の学校が早期イメージンを採用しているということになる。

3 友人学園（オレゴン州アメリカ）の例

次に、日本語イメージンプログラムを実施しているアメリカオレゴン州にある友人学園の例をイメージン教育の目標にそって考察する。

(1) 学校の概要

アメリカで最初に日本語イメージンプログラムを取り入れた幼小中高13年間一貫の公立学校。1988年に開設。部分イメージンで進めている。生徒は様々な学力、背景があり、日本人の保護者を持つ生徒もいるが、ほとんどの生徒が日本語、日本文化に触れるのは初めてという状況である。保護者の日本語イメージンプログラムに対する姿勢も様々で、非常に熱心で関心があるので子供を入学させたという人もいれば、地域にある一番近い学校なので入学させたという人もいる。

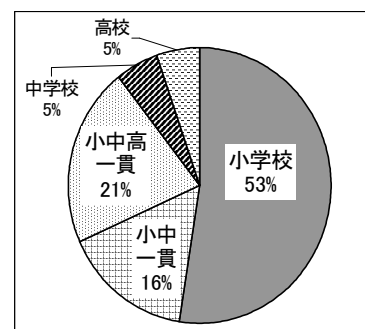


図1 学校種の割合

(2) イメージン教育の目標からの考察

① 第二言語能力（日本語）の習得について

表3 学校種別日本語の接触時間の割合と指導内容

学校種	日本語の接触時間の割合と指導内容
幼稚園	毎日 80%を日本語、20%を英語
小学校	一日のうち半日を日本語、半日を英語
中学校	毎日、読解、地理を2時間日本語と英語で、日本語の会話と文法を1時間
高校	日本語と日本文化を毎日1時間

学校種別による日本語の接触時間の割合と指導内容は表3に示した通りである。ここで注目したいのは、日本語のインプット量は幼稚園の時期が80%と一番多いということである。挨拶や天気の話から始まり、教師の普通のクラスルームジャパニーズから生徒は自然に学ぶという。第二言語習得理論によると、日常的な表現というのは、言語習得の初期段階で、意味のあるまとまりとして覚えると言われている。文字指導も幼稚園から行い、幼稚園では48のひらがなを学ぶ。小学校1年でひらがなの復習と漢字を少々、2年ではカタカナを学ぶ。しかし、小学校の段階では細かい文法事項は教えない。

② 地域が指定する教科学習内容の達成について

カリキュラムはカリフォルニア州の指導基準に則って日本語、英語の両方を編成している。一つ一つの教科を個々に指導するのではなく、あるテーマを設け、そのテーマの下に教科との関連性を体系づけて指導する。読解、理科、その他の教材に日本の教科書を使う事もある。また、放課後等の補習体制も整っていて、学習が遅れがちな生徒を支援している。

③ 異文化受容姿勢の育成について

アメリカにおける公立学校でのイメージンプログラムの目標は、アメリカ独自の社会的問題解決のために設定された。すなわち、より豊かな教育を提供するため、又、多くの移民とその子弟のための教育機会の平等のためであった。アメリカは多民族国家であるが、主流の英語さえできればよい、生活には困らないというモノリンガル的な社会の価値観もある。そのような社会の中で、このプログラムで学んだ生徒達は「自分の知らない英語以外の言語が世の中にはある」ことを知り、日本語を学ぶという活動の中から「自分と異なる物の見方をする世界がある」ということを自然に体験する。そして「他者理解」「マイノリティの受容」「価値観の異なる他との共生」の姿勢を身につけ、コミュニティに対しても好意的になったという。実際、教師達のインタビュー調査では、生徒の間に「異なるものを恐れずにまず受け入れる姿勢」が育っていることを高く評価しているという結果が出ている。さらに、生徒達にとっては日本語ができることが、自尊感情の育成にもつながっているということがわかっている。

④ 母語（英語）の発達について

表4は、1997年から1999年に実施された州標準学力テストの読解力と算数の達成率を、友人学園、地区、州とで比較したものである。小学校3年生と5年生の抽出だが、どの年度においても、友人学園の生徒の読解力、算数の達成率については、地区や州の生徒とほぼ同等であり、さらに年度が進む

につれて上がっているのがわかる。図2と3は、1997年時小学校3年の生徒の2年後(1999年)の変化を見たグラフであるが、友人学園は1999年には読解力、算数共に地区、州を上回っているのが明らかである。図2の読解力を見ると、1999年には地区、州が下がっているにもかかわらず、友人学園は上がっている。図3の算数では、友人学園は1997年時には地区、州よりかなり劣っていたが、1999年には著しく伸びていることがわかる。この結果から、第二言語(日本語)の学習が生徒の母語(英語)の発達には何も問題はなく伸びていくこと、また、他教科も共に伸びると言える。

表4 州標準学力テストの達成率の比較 (%)

年 度	対 象	小 学 校 3 年		小 学 校 5 年	
		読 解	算 数	読 解	算 数
1997年	友 人 学 園	85	51	91	48
	地 区	89	71	80	73
	州	77	62	65	59
1998年	友 人 学 園	86	75	88	88
	地 区	88	77	78	74
	州	78	67	66	61
1999年	友 人 学 園	91	86	89	83
	地 区	89	82	81	80
	州	81	70	68	66

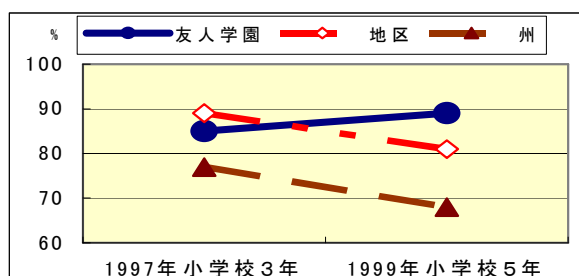


図2 読解力の推移

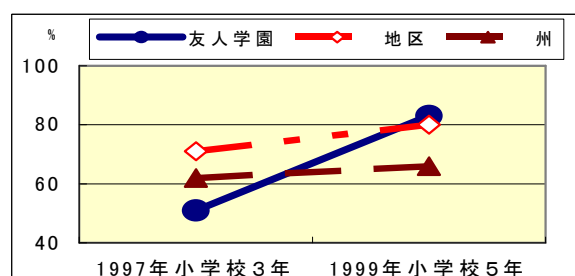


図3 算数の推移

Ⅲ まとめと今後の課題

友人学園の例から、イマージョン教育は①早期からのインプット量が重要な鍵であること、②カリキュラムは、独自の統合プログラムが有効であること、③他を受け入れる姿勢をも育むことができること、④母語の発達には何も問題がないこと等、「今までで最も成功した外国語教育 (Stern 1977)」と言われている理由が明らかである。

特に、イマージョン教育の4つの目標のうちの「異文化受容姿勢の育成」については注目すべき特徴だろう。生徒は第二言語を学ぶことを通して、「他人を理解する」、そして「自己を知る」、そして「他者との共生社会」の姿勢を自然に身につけることができるという。これはイマージョン教育が、単なる言語習得のためだけの教育ではなく、教育の原点である人として生き方・在り方、心の教育をも実践するプログラムであることを意味している。国際社会の中で他民族と共生していく必要のある現代人にとって重要な資質であろう。

最後に、この一年間の様々な研修・実践を通し、英語イマージョン教育における中学校の英語教師の役割は何だろうかと考えてきた。人は言語を「聞く→話す→読む→書く」の順で習得すると言われている。早期英語イマージョン教育で、小学校の時期に第二言語に浸りきるという環境の中で「聞く、話す」力を自然に身につける事ができれば、中学校で生徒が必要とする力は「読む」力になるだろう。「読む」ということは情報を得るということである。たくさんの情報を得て理解することは、自分の考えを文字として表現していく「書く」ことの基礎であり、どの教科においても必要な力である。故に、英語教師の役割は、生徒の「読む力を育てる」ための支援ではないかという結論に至った。生徒に、速く正確な読解力を身につけさせるための指導、読解力に必要な語彙力を増やすための指導、基本的な文法指導、何よりも読むことを楽しむ指導等、今後も指導の工夫改善のために研鑽を積んでいきたい。

<主な参考文献>

- 三輪充子 2006 「アメリカ合衆国におけるイマージョン教育」 『国立教育政策研究所紀要』 第135集
 Donna Christian and Fred Genesee 2001 「BILINGUAL EDUCATION」 TESOL, INC.
 山本雅代 1999 「バイリンガルの世界」 大修館書店